自然の存在論的偶然性:カントの『判断力批判』に おける自然理解を手がかりに

円谷, 裕二 ^{九州大学文学部}

https://doi.org/10.15017/2328438

出版情報:哲學年報. 57, pp.127-147, 1998-03-10. 九州大学文学部

バージョン: 権利関係:

自然の存在論的偶然性

カントの『判断力批判』 における自然理解を手がかりに―

円

谷

裕

はじめに

第一節

め宿っていると思われるからである。 できるのかと言えばそれもまたはなはだ疑わしい。そのような態度には自然の捉え方における特定の偏見があらかじ 法という観点から「自然とは何か」という問いに接近する近代および現代の哲学が、自然をその全体性において理解 する考察態度は、方法論的には素朴な問いと答えだと言えるであろう。しかしながら他方、人間による自然認識の方 であるか」と問い、目的論的存在であるとか機械論的存在であるとか神の被造物であるなどと答えるような自然に対 をどれだけ利用することができるのか」という意味として理解してきた。「知は力である」というフランシス・ベーコ 意味としてではなく、「我々人間が、自然をどのような方法によって知ることができるのか、そしてそれによって自然 ンの言葉はそのことを端的に表現している。確かに、古代ギリシアや中世におけるように、「自然がそれ自体として何 「自然とは何か」。デカルト以降の近代哲学は一般に、この問いを、「自然はそれ自体において何であるか」という

観点、さらには美的観点などからこの問題を取り上げ、しかもそれら諸観点の相互関係にも配慮しながら自然をその 本稿では、「自然とは何か」という問いに対して、様々な角度から、たとえば機械論的観点、 目的論的観点、

全体性において理解しようと試み、その意味では現代においてもなお自然考察の手がかりを与えていると思われるカ・・・ ントの自然論を中心に考えてみたい。

的理性(前期シェリング、ヘーゲル) に基づいて自然を閉じた体系と見なすような目的論的自然観ではない。 考えない。しかしながらまた彼の目的論的自然観は、彼に続くドイツ観念論のように、絶対的自我(フィヒテ)や絶対 に、有機的自然についての日常の目的論的言明が機械論の理論や語法にことごとく翻訳したり還元したりできるとは 析論」においては、「純粋自然科学はいかにして可能か」という問いに答える形で、自然を、「因果性の原則」に従っ 力の批判」においては、有機体としての自然の理解に際して目的論的自然観を導入する。彼は、生物機械論者のよう て機械論的に認識されうるものと理解する。ところが、『判断力批判』に至ると、たとえばその第二部「目的論的判断 越論的分析論」に見られる機械論的自然観がその核心だと見なされがちである。確かにカントは、『純粋理性批判』「分 ところで、カントの自然観といえば、新カント派の認識論的カント解釈の影響もあってか、『純粋理性批判』の「超

うに理解していたのかという問題であろう。そしてこの問題は次の二つに下位区分される。 ることは言うまでもないが(本稿第二節・第三節)、しかしより根本的な問題は、カントが全体としての自然をどのよ カントの自然論の考察に際しては、彼の機械論的自然観と目的論的自然観のそれぞれの内容の分析が先決問題であ

を吟味してみると彼の見解が生物についての当時の学問的状況に制約された側面が多分にあることに気づく。そこで 係を、「機械論の目的論への従属」と表現し有機体の判定に際しての目的論の優位を主張する。しかしながらその根拠 両者はどのように関係するのかという問題である。彼は、有機的自然を論じる『判断力批判』第二部においてその関 「機械論の目的論への従属」という彼の言葉の意味を有機体論に限定せずに彼の哲学全体から捉え直し、そのうえで 第一は、機械論と目的論との双方を認めるカントの自然観において、全体としての自然という観点にたった場合、

目的論の優位というカントの思想の真意を探ることにする。(本稿第四節)

210)°

自然に対する超越論的立法において、ただ経験一般の可能性の諸条件をその形式に関して考察したにすぎない」(XX

確かにそのかぎりでは、「悟性の超越論的な諸法則に従う経験一般」(XX209)は、したがってまた「経験のす

決着をつけるわけではなく、むしろ、そのためには、 第二の問題は、「機械論の目的論への従属」という問題に見通しをつけることが直ちには全体としての自然の問題に 機械論的自然観および目的論的自然観とは別の自然観を視野に

入れる必要があるのではないかという問題である。(本稿第五節・第六節

機械論的自然観の原理としての「因果性の原則」、 およびその限界について

必然的に従うかぎりでの、「空間と時間における諸現象の合法則性としての自然一般eine Natur überhaupt」(B165) るという自然科学の客観性の要求に対して、その権利根拠を超越論的に基礎づけようとしている。 然の客観的諸法則を探求する。つまりカントはこの原則によって、意図や目的因の助けを一切借りずに自然を認識す 主観的な解釈や目的や意図をも差し挾まずに自然を探求する原理であり、それゆえ自然科学はこの原則に基づいて自 論」の叙述からは看取できる。「因果性の原則」は、「合法則性としての自然一般」の可能性の条件として、 因果性の原則は、目的論からは全く独立に機械論的自然観の原理たりうることを、少なくとも『純粋理性批判』「分析 あるいは「すべての現象の連関における自然統一Natureinheit」(B263) を意味する。この意味での自然に関しては にするこの原則は、それがなければ所与の諸知覚から経験の統一が成立しえない原則として、経験一般の可能性の「構 すべて原因と結果を結合する法則に従って生じる」(B232) ´という原則である。原因と結果の必然的な時間継起を可能 自然についての客観的な因果認識の可能性の条件である「因果性の原則」つまり「経験の第二類推」とは、「変化は ところが、『判断力批判』に至ると『純粋理性批判』「分析論」での自然の分析が次のように捉え返される。 したがってまた、『純粋理性批判』「分析論」に定位するかぎり、自然とは、 この因果性の原則に 「悟性は かなる

一二九

も「悟性は、自然に対する自らの超越論的立法において、それらの可能的な経験的諸法則の多様性をすべて、捨象す・ 結しない」(ibid.)。なぜならば、「経験的な諸法則にも従う自然」の「多様性と異種性は非常に大きく」(ibid.)、しか 然に対する悟性能力の限界が明確に自覚されるに至る。 うして『判断力批判』においては、悟性が「捨象する」ところの、経験的諸法則に従う多様性と異種性に富む自然は、 則の多様性と異種性に関しては、[悟性による] 立法的な認識能力のすべての制限から、自由なのである」(ibid.)。こ る」(XX210) からである。言い換えれば、「自然は、特殊的[で経験的]な諸法則に関しては、また、それらの諸法 っては、「経験的な諸法則にも従う自然が人間の認識能力にとって理解しうる一つの体系になっているということは帰 て、・・・一つの体系をなしており」(ibid.)、決して「単なる集合」(XX209) ではない。しかしながらこのことによ べての対象の総括としての総体的自然」(XX208) は、「悟性自身がアプリオリに与える超越論的な諸法則に従っ 『純粋理性批判』「分析論」の観点からは「偶然的なもの」(ibid.)と映じてしまうとともに、そのような「偶然的」自

る。自然の偶然性を救う原理を、カントは反省的判断力の「自然の合目的性」 (XX 216) の原理に求める。合目的性の⑸ きなくなる」(XX214)。 原理という「この前提がなければ、可能的な特殊諸法則の多様性という迷路の中で我々は正道を見つけだすことがで この問いに対するカントの答えは、否である。というのも、このような「偶然的」自然に関しても、 法則はそのつど「単に当てずっぽうに、かつ盲目的に」(XX212)理解されるがままにならざるをえないのであろうか。 「体系的統一」にもたらそうとする「理性の思弁的関心」(B714) が我々人間にはアプリオリに備わっているからであ それでは、悟性の合法則性の下に「包摂」され得ない「偶然的」自然は、偶然のままに放置され、特殊な経験的諸 なおかつそれを

省的判断力の合目的性の観点に立って理性の体系的連関に組み入れようとする。 こうしてカントは、悟性にとっては偶然的と映じる特殊的で経験的な自然、すなわち美的自然や有機的自然を、反

三節 目的論的自然観—有機体の場合—

合目的性の原理に基づいて判定可能なものとする。 目的的存在者という意味で「自然目的Naturzweck」(233§64) と呼び、そこに見られる特有の現象を反省的判断力の る有機的存在者の認識不可能性の自覚のもとにカントは、有機的存在者をそれ自身において目的を有するような自己 けられたのではない[機械論的]自然法則によって理解させてくれることを予測したり希望したりすることだけでも、 象と思われた。「多分いつかはニュートンのような人物が現れて、一本の草の茎の産出だけでも、意図によって秩序づ まな特有の現象を呈するが、カントにはこれらの現象が、悟性の合法則性のもとには包摂されえない自然の特殊な現 や成長を繰り返し、また体内を自己制御して均衡状態を維持し、さらには他の個体を産出するというように、 人間には不合理なことなので、むしろこうした考えは絶対に否定されなければならない」(265§75)。機械的法則によ 容易にわかるように、単なる無機的物質とは異なり、外的物質を吸収し自らの全体へと有機化し、

産物のように目的因を自己の外部にもつのではなく自己自身の内部にもつ自己目的的存在者であるかぎり、 部分が相互に他の諸部分を産み出す機関hervorbringendes Organとして思考される」(ibid.)。この第三の条件が最も 諸部分は相互に原因であると同時に結果であることによって、全体へと結合されている(236§65)。第三に、「あらゆる り、それゆえその諸部分は、目的という全体によってアプリオリに規定されるからである。第二に、有機体は、技術 物質との「外的合目的性」(293§82) の観点からではなく有機体内部の機能や構造の可能性の条件として、次の三つの 点を指摘している。第一に、有機体(自然目的) は、全体が単に諸部分の総和にすぎない機械的技術産物とは異なり、 「全体との連関によってのみ諸部分が可能である」(235§65)。というのも有機体はそれ自身において一つの目的であ カントは、自然目的としての有機的存在者の「内的可能性」(236§65) の条件として、つまり有機体を他の有機体や 有機体の

できるからである。有機体の「自らを繁殖させ形成する力」(237865)は、「機械論」におけるように外部からの「動 重要である。というのも、たとえばどんなに複雑な時計でさえも、或る歯車が別の歯車を「産み出し」たり或る時計 が別の時計を産み出したりすることはなく、また故障を自ら修理することもないが、有機体にはこれらすべてを期待

かす力」(ibid.) では説明できない。

有機体を反省する際に、合目的性という反省的判断力自身のアプリオリな原理に基づいてあたかも有機体が自己目的 III)に基づいているのであり、自然それ自体に関わるアリストテレス・スコラ的な態度とは方法論的に相違している 法則性としての自然一般」(B165)に対する機械論的態度と同様に近代に特有な主観主義的な「思考法の革命」(BX す(herausheben)のではない」(XX220Anm.)。この意味においては、 有機体に対するカントの目的論的考察態度は「合 ことである。「我々が目的因を諸物の内へ置き入れる(hineinlegen)のであって、目的因をいわば諸物の知覚から取り出 的存在者であるかのように主観の側から有機的客観に対して目的概念を「考え加える(hinzu denken)」(ibid.) という と素朴に前提したうえで「観察」(264§75)を通して上記のような目的論的諸条件を経験的に模写しているのではなく、 機体の考察の際のカントの方法論に関して留意すべきは、判定者は、有機体をそれ自体において目的論的な存在者だ 以上のような特徴づけによってカントは自然産物としての有機体を人工的な技術産物から区別するのであるが、有

第四節 自然理解における機械論と目的論の関係

と言える。

するのであろうか。近現代においては、デカルトの動物機械論以来現代の分子生物学やその応用としての遺伝子工学 その構造や機能を目的論的に判定するという自然に対するカントの目的論的態度は、機械論的態度とどのように関係 以上のように、有機体を、他の自然産物との外的関係からではなくその内的可能性から見て「自然目的」と規定し、 みることにしよう。

などの生命科学に見られるように機械論優位の趨勢にあるが、それでも生物に関する機械論と目的論との対立ない 相互の関係という問題は、依然として議論の余地のある問題である。

ろう。しかしながら自然についてのカントの考察態度は、あくまでも自然が主観の認識能力(広義の)(Vgl.36Einl.IX) を受ける。もしそうであるならば、機械論と目的論は、対象領域の相違に応じて単に並存するにすぎない自然の判定 が妥当するというように、 在者だとあらかじめ前提するような態度ではない。 によっていかにして理解されるのかという問題意識に貫かれており、そのかぎりでは自然を物自体のごとき実体的存 自然と有機的自然の区別基準を不問に付したまま両者をあらかじめ独断的に区別してしまう議論だということにもな 方法だということになり、 ところでカントの叙述からは、一見すると、無機的自然に関しては機械論が妥当し、有機的自然に関しては目的論 自然領域を区別することによって機械論と目的論を単に棲み分けしているにすぎない 両者の関係の問題は既に解消していることになろう。それとともに、その際には、

察するために、さしあたり、カントが無機的自然と有機的自然とを区別する理由として語っている次の言葉に注目して う仕方で両者の関係を位置づけようとしている。『判断力批判』における機械論と目的論のこのような関係を詳しく考 おける機械論と目的論という二種類の態度を相互に排他的な態度だとは見なさずに、機械論が目的論に従属するとい 結論を先取りして言えば、『判断力批判』においては無機的自然であれ有機的自然であれ自然理解に

びつけられるのであろうか。そうなるのは、機械論に従う自然研究が観察や実験に従属させられるものに限られるか ものに固定されるからである。というのも我々が完全に洞察できるのは、 「それにしてもなぜ目的論は、 すなわち少なくとも法則の類似性という点から見て自然と同様なものを我々が自ら産み出すことができる 一般に理論的自然科学の独自の一部門をなさずに、 概念に従って我々が自ら制作し産出するこ 予備学ないし過渡として神学と結

術的産物において再現可能な場合にのみ、自然を「完全に洞察」できる。自然科学は、自然の実験的再現に基づき、 とのできるものだけだからである。他方、自然の内的目的としての有機的組織は、技術による類似物を現示できるす に「完全に洞察」されえない。ところが「有機的組織」は「技術によって類似物を現示」することが全く不可能であ かつ、そのことは「技術」に依存するのである。逆に言えば、技術的再現が可能なかぎりにおいてしか自然は客観的 それゆえ、 無機物質と有機体の相違は技術による産出可能性の如何に存するということである。

明は、裏を返せば、もし「有機的組織」を、たとえそれと完全に同一のものを技術的に産出(制作)できないにしても、 が、しかし有機体の機械論的説明は現代科学の状況からすれば全く不可能だと断定しえないことは予想されうるであ 機械論において説明できるようになっている。もっとも現代の生命科学でさえも、目下のところ一個の有機体を完全 を司る核酸の塩基配列や生命活動の担い手であるタンパク質のアミノ酸配列を決定したり、さらにはそれら核酸やタ 生物の内的仕組みに関しては、カントの時代におけるような単なる観察による経験的記述の方法ではなく、遺伝情報 当のカントが認めていることを示唆しているからである。しかも現代生物学に目を転じれば、たとえば分子生物学は、 人工的産出の絶対的な不可能性を推測し、それを根拠にして、有機的存在者が無機物質とは質的に異なるものだと推 に人工的に産出できるわけではなく、ましてやより複雑な有機体に関しては将来の技術的進歩にまつほかはないのだ るものを技術的に産出(制作)することができるとすれば、有機体は、自然科学的な機械論の対象にもなりうることを ンパク質を人工的に合成するほどの実験科学のレベルに達しており、かなりの程度において生命現象を物理化学的な -法則の類似性」においてそれを産出(制作) しうるとすれば、すなわち構造や機能において「有機的組織」と類似す しかしながら、カントのこの言明は有機的自然の固有性を基礎づけうるにたるものであろうか。というのもこの言 当時の生物学、というよりもむしろ博物誌Naturgeschichteの現状から将来的にも有機体の技術的

断してしまったのであろうか。

ける目的論の意義というよりも、むしろ、生物機械論に道を譲ることになってしまう可能性が大いにあるからである。 物と有機体との区別は生命科学の進歩に応じて左右される相対的な区別であって決して両者の質的差異にはなりえな 確に一線を画するわけではないとも言えよう。 械論にできるかぎり従う」(285880) べきだと言いえたのでもある。つまり自然探求における機械論的観点の意義を認 ものがどのような考察態度で自然を理解しようとするのかどうかに応じたものだと言えよう。そうであるがゆえにカ て自然に立ち向かうのかという観点に立っているかぎり、対象それ自体の質的相異如何に左右されるものではない おいてどのような性質をもつのかという素朴な観点からではなく、自然を判定する我々がどのような判定原理に従 対視しているわけではない。というのも既述のようにそもそもカントの自然に対する見方は、 いと思われるからであり、逆にその場合ならば、機械論的態度こそが自然探求の態度として有効であり、 ことができないのではないだろうか。というのも、「法則の類似性」における技術的産出の有無という観点からの無機 ついての目的論を主張しているのだとするならば、そのかぎりでの目的論に対してはそれほど積極的な意義を認める ントは、 もしもカントが有機体との「法則の類似性」さえをも技術的に産出不可能性だという理由にのみ基づいて有機体に 安易に目的論を導入すべきではないことを当のカントが認めており、 かしながら実は、 有機体に関しても、それの機械論的説明は「無制限」(284§80)であり、「自然産物の説明のために自然の機 したがって有機的自然と無機的自然の区別とは、 カント自身も、有機体と無機物との質的差異をそれぞれの物それ自体の内的性質の差として絶 自然それ自体の側に存するのではなく、 その意味では現代の生物学とカントとが明 自然産物がそれ自体に 自然を判定する 有機体にお か

ようなものなのであろうか。この問題はカントのいう目的論の積極的意味に関わるとともに、 それでは、 カントが有機体を特に引き合いに出しながら主張している自然に関する目的論という考察態度とはどの 延いては彼の自然観

基本に関わる問題でもある。この問題を立ち入って考察するためには、あらかじめ、目的論と対比される機械論的考察 態度の内容を吟味しておく必要がある。そうすることによって機械論と区別される目的論の積極的意義が際立ってく

るからである。

§43またはXX199)の目的意識なり関心なりを前提にせざるをえないからである。 的産出は、カントの技術論によれば、その装置の仕組みや働きを、つまりは装置の「現実性」(155§43) をあらかじめ 作した実験装置において「自然を強制する」 (BXIII) ことができる場合に限られるからであり、しかも実験装置の技術 るどころか、本質的に、ある特有な意味での目的意識に制約されていることに気づかせられる。というのも、上記引用 自らの知を客観的自然そのものについての知と自己理解している。ところが、『判断力批判』におけるカントの技術論 捨象することによって、自然そのものの客観性を法則として認識する学問だと見なされており、また、自然科学者も 規定的に構成するところの、装置の「外部」(236§65) の「理性的存在者」(ibid.) ないしその「選択意志Willkür」(155 (z.B.Vgl.§43)を念頭においた場合には、因果機械論的な方法に基づく自然科学が、主観的な目的や意図から独立であ (248§68) のカントの言葉が語るように、自然科学はそれが自然について「完全に洞察できる」のは、技術によって制 さて、一般的には、現代における生物科学をも含めた自然科学はその自然探求において単に主観的な目的や意図を

識にとどまらず、同時に、自然現象を人工的に再現することによって自然を制御し道具化するという意図が隠されて えば、自然科学の機械論的方法の背後には、単に実験装置を技術的に産出して自然を純粋に認識しようという目的意 自然科学者はそのことを忘却し、自然の客観的事実を普遍的法則によって認識していると思いこんでいる。さらに言 術の命法」(XX200Anm.) を定立する選択意志の技術的目的意識に制約されているのであり、それにもかかわらず、 いると言えよう。自然科学の自然理解の方法論は単なる観想や観察ではなしに実験的方法と結びつくことによって根 つまり近代自然科学の機械論的考察態度は、知の客観性を標榜しながらも技術との不可分性のゆえに、仮言的な「技 的定立の働きに先行的に条件づけられているのである。 ができると思われていたが、しかしながら、機械論的方法はその本質において、目的や関心から無縁でないどころか、目 は、自然、特に無機的自然に関しては、主観的な目的や関心を捨象して純粋に客観的観点からのみ自然を認識すること 探求というその方法論的特徴のうちに、本質的に、支配的目的意識を宿しているのである。当初は、そしてまた一般的に 批判』「分析論」における認識論のみならず『判断力批判』での議論を考慮に入れることによって、自然科学における III)において「自然を強制」し支配するという技術的目的意識の「置き入れ」をも意味する。このように『純粋理性 ての「因果性の原則」に対象が従うことであるにとどまらず、同時に「その原理に従って理性が考案した実験」(BX と見る「思考法の革命」(BXIII)、つまり、「あらゆる認識が対象に従う」のではなく「対象が我々の認識に従う」(B 本的に人間による自然の技術的制御や支配という目的意識に支えられているのである。 XVD) という主観の「置き入れhineinlegen」とは、『判断力批判』の技術論を踏まえる場合には、 原理的に、技術的目的意識が潜在していることが窺知される。機械論は、実験的方法による自然の カントが近代自然科学の本質 単に、主観形式とし

が、有機的自然を特に引き合いに出しながら提示している目的論という自然の考察態度とはどのような特徴をもつの ところでそれでは、以上のような意味での目的意識を背後に宿しながら自然に立ち向かう機械論に対して、

うに有機体の内へと目的概念を「置き入れる」反省的判断力の原理である。機械論における目的概念とは、 自己目的的存在者と見なす原理ではなく、有機体を主観的に反省する場合にあたかも自己目的的存在者であるかのよ・・・ 目的を有する存在者と見なす原理であるが、しかしながらカントの目的論は、有機体をそれ自体として目的を有する 実践理性(選択意志)の目的意識であるのに対して、有機体の判定に際しての目的論とは、有機体をその内部におい 機械論における目的意識とは、実験装置という技術産物の産出に関してその外部から目的を定立するような技術的 それに従

の類比から考えられるとしても、そのような実践的合目的性とは全く異なるのである」(17Einl.IV)。 ない。「[自然の合目的性という] 概念は、たとえそれが(人間的技術やあるいはもろもろの人倫の) 実践的合目的性と もとに包摂するのではなくそれらを体系的統一のもとに反省的に包摂する主観的「統制的概念」(238§65) にほかなら る人にとっての・・・認識根拠」(236§65)にすぎず、有機体の諸部分の多様性や偶然性を因果性という構成的概念の する原因であり、その意味においてそれは、規定的判断力における「構成的概念」(Vgl.238§65) だということになろ って技術産物が制作されるがゆえに、 目的論において置き入れられる目的概念は、自然産物を現実に産出する原因ではなく単にそれを「判定す 産物内部の諸部分間の機械的因果性に先行し、その制作物の現実存在を可能に

自然における機械論と目的論との関係を、機械論の目的論への「従属」(284§80)と表現するのである。 論を最大限に継続させようとするための「発見的」「統制的」原理である。このような意味においてカントは、 て多様性と偶然性に満ちた有機体の全体的統一性を度外視してしまうような機械論の不十分さを自覚しながら、 初めから排除してしまうものではなく、有機体を因果的で形式的側面だけから諸部分の単なる集合と捉えそれによっ う仕方で全体へと統一されているかのように有機体を捉える態度である。しかもカントの言う目的論とは、機械論を 念に包摂されるべき単なる要素と見なすのではなく、あたかも諸部分が相互に原因であるとともに結果でもあるとい 論が機械論から区別される所以がある。目的論は、有機体における多様性や偶然性を、「構成的概念」としての目的概 目的概念へと全体化することによって有機体を意図的に支配しようとすることを拒否する態度、この点にこそ、目的 できるかぎり機械論的態度で有機体を探求しながらも、有機体の偶然性や多様性に関してはそれらを、「構成的な」 有機的

の有機的存在者の「内的可能性」に定位するだけでは十分ではない。しかしながらまたこの問題への手がかりは、カ どのように理解しているのかという問題を考察することにしよう。この問題に関しては、自然の内部的存在者として 有機的自然における機械論と目的論の以上のような関係を踏まえながら、次節では、カントが全体としての自然を

ントが有機体の議論において語っているところの、 機械論の目的論への従属という思想に存している。

第五節 全体としての自然と道徳的自然観

う観点からでは不十分であり、それを自然の全体的統一というより包括的観点に置き移して捉えなければならない。そ れによってこそ、機械論の目的論への従属というカントの主張の真の意味にも達しうると期待できる。 への移行である。カントの自然論は、それを全体的に理解しようとするならば、個々の有機体の内的機能や構造とい いうところまで拡大しようとする。つまり有機体における「内的可能性」の観点から自然の「外的合目的性」の観点 有機体の理解における機械論の目的論への従属という思想を、全体としての自然における機械論の目的論への従属と に行きつくのであり、理性の諸原理に従う自然のすべての機械論はこの理念に・・・従属させられなければならない」 (242§67)。このように有機的存在者をカントは経験の全体的統一との直接的な連関のうちに置き移すことによって、 カント曰く「[自然目的という] この概念は諸目的の規則に従う一つの体系としての全体的自然という理念に必然的

١ っそう手段として位置づけられることになる。つまり全体としての自然統一という統制的原理においてこそ、 体が他の無数の有機体との外的関係やさらには自然環境全体との関係から判定されるときには、 然全体(世界)」に位置づけられながら判定される場合にこそ、機械論の目的論への従属がより明確化してくる。 って、この目的に、手段として従属させられうる」(281§78)。有機体は、それが「内的可能性」の観点を越えて、「自 的なものを、反省的判断力の普遍的原理として想定するときにはなおさらのこと、・・・物質は、 に関する機械論は、 「無限に多くの自然の有機的産物を誘因として、・・・自然全体(世界) (das Naturganze(die Welt))のために、 ・の言葉の真意は、このように、有機体を自然全体に位置づけて判定する場合にこそ十分に理解可能になる。 手段に関わる機械論として明確になってくる。機械論が手段として目的論に従属するというカン 機械論的諸法則はい 機械論的法則にかな

的体系的統一との連関において捉えることだと考えていたこととも符合するであろう。 ことは、カントが自然の合目的性の原理を導入する際にその原理の基本的役割を偶然的な特殊諸法則を、 全体としての自然という観点に立って理解される場合にこそ、その積極的意味が明らかになるであろう。・・・・・・・ 化された自然と見なすことにもつながるおそれがあろう。かくして機械論の目的論への従属というカントの立場は、 する態度も有機体の目的論的理解にとっては不十分であり、それはまた、有機体を、個々の物理化学的過程という抽象 に、全体としての自然を抽象化した自然でしかない。また他方、有機体をその「内的可能性」のみから判定しようと たがってそれを機械論的に認識することも原理的に不可能である。言い換えれば、実験的に再現可能な自然とは、 らそれを計測しなければならず、そのかぎりにおいて、自然全体を実験的に再現することは原理的に不可能でありし いかに科学技術が発展したとしても、実験装置を制作する科学技術者や実験を観察する科学者は、 機械論の目的論への従属とは、カントにとって、全体としての自然統一という理念への機械論の従属を意味する。 実験装置の外部か そしてこの

的自然観に対する目的論的自然観の優位を看取することができる。 (3) 合目的的連関に位置づけられるかのように判定することである。ここには、自然の偶然的存在者に関しての、 分に判断することのできない偶然的な自然内部的産物を、反省的判断力の「合目的性の原理」に基づいて、 での機械論の目的論への従属ということである。カントの自然論とは、自然の体系的統一へ向けて、機械論的には十 機械論の目的論への従属というカントの主張は、結局のところ、「自然全体(世界)」の体系的統一という理念のもと あたかも

しかしながらここに至って我々はカントの自然論における根本的な問題に遭遇する。それは、全体としての自然、

つまり「自然全体(世界)」とは何かという問題である。

しようとすることも自然に対する一つの可能な態度ではあるが、しかしそのような機械論的態度は、既述のように、 自然内部に見いだされる偶然的存在者に関してならば、それをできるだけ因果性の原則に基づいて機械論的に説明

頼りにして、 機械論の目的論への従属という仕方で解決した後でも依然として残るより根本的な問題であり、 的身分を異にするからである。この問題は、 のように判定するのかという問題が生じてこざるをえない。言い換えれば、全体としての自然の存在論的身分をカンのように判定するのかという問題が生じてこざるをえない。言い換えれば、全体としての自然の存在論的身分をカン する態度であって、自然の合目的性の原理の最終的な基盤としての「自然全体(世界)」に関する態度であるかどうか いうのがカントの自然論であった。しかしながら、自然に対する目的論的態度はあくまでも自然の内部的存在者に関 抽象化された自然に対する考察態度にすぎず、多様で偶然的なものを含んだ全体としての自然を捉えるには不十分で 論の限界問題と言えるであろう。 トがどのように考えているのかという問題である。というのも全体としての自然は、自然の内部的存在者とは存在論 は既述の議論のかぎりでは未だ曖昧なままである。そうであるかぎり、全体としての自然それ自身に関してそれをど そのような全体としての自然に関しては、「偶然的なものの合法則性」(X X 217)としての合目的性の原理を その偶然的なものを自然全体との関係においてあたかも合目的的に存在するかのように判定すべきだと 有機的自然における機械論と目的論の関係という前節で論じた問題を、 いわばカントの自然

えないにちがいないからである」(B705強調はカント)。 というのも[後者のような]説明根拠は世界の外部になければならずしたがって可能的経験のいかなる対象にもなり 可能性の説明に使用されうるのであって、世界全体Weltganzesそれ自身の可能性の説明に使用されうるのではない。 りでの現象しか認識することができないからである。「[実在性、 というのも、自然全体(世界)は一挙に感性的に与えられることはなく、しかも、 うに、自然全体(世界)を一つの対象として理論的に認識することは感性に制約される人間悟性には全く不可能である。 自然観とでも呼びうるものである。すなわち、『純粋理性批判』「弁証論」の「世界概念」の箇所からも窺知しうるよ カント自身ももちろんこの問題を取り上げており、そしてそれに対して彼が与えようとした一つの答えは、 実体、 因果性などの悟性] 人間悟性は感性的に与えられるかぎ 諸概念は感性界の事物の

的Endzweck」(303§84)として提示し、自然全体をこの目的概念のもとに包摂することによって「自然概念の領域か 然の外部の一定の目的概念によって、自然全体が目的論的に判定されるわけである。 ら自由概念の領域への移行」(15Einl.III)という『判断力批判』の課題を果たそうとする。この「究極目的」という自 めの目的論的根拠を求めなければならない。こうして彼は、自らの道徳哲学を踏まえながら、道徳的主体を「究極目 っていては「全く解決できず」(231863)、そのためには、「自然を越え出て」(241867) 自然の外部にこそ、判定のた とする。彼によれば、自然全体をあたかも合目的的連関にあるかのように判定しうるためには、自然の内部にとどま こうしてカントは『判断力批判』に至るとこの問題に際して「合目的性の原理」を拡大解釈してその解決を図ろう

然を人間の実践理性へと従属させることによって、自然を人間の道徳のための単なる手段として位置づけることにな 部」に求めることにより、自然についての目的論的考察を、一つの閉じた完結した体系としてしまい、さらには、自 るのではなかろうか。 論的に埋めることにはなろう。しかしながらまた同時に、この道徳的自然観は、自然全体(世界) の根拠を「自然の外 と位置づけてそれを道徳に還元するというこの道徳的自然観は自然概念と自由概念の「大きな溝」 (33Einl.IX) を目的 確かに理論領域と実践領域にわたるカント哲学全体の体系性という観点からすれば、自然全体を道徳のための手段

味するよう事柄そのものの方から強いられる思いがする。そこで次の最終節では、この問題についての我々自身の見 見た場合、このような自然観を妥当なものとして受け入れることができるのであろうか。ここに至って我々は「全体 としての自然とはそもそも何か」という問題がなぜ問題として意味をもつのかということを了解し、この問題を再吟 たしてこのようなカントの道徳主義的自然観に賛意を表することができるのであろうか。また事柄そのものに即して しての尽きることのない多様性と異種性をも犠牲にしてしまうような自然観に陥りはしないのであろうか。我々は果 それとともにまたこのような道徳的自然観は、『判断力批判』「序論」でカント自身が述べていた自然のそれ自身と 考えたからではあるまいか。

解を示唆することにしよう。

第六節 おわりに――自然の存在論的偶然性へ向けて――

う。そうであるならば、「無規定的」な「自然全体」を、「究極目的」という一定の規定的概念によって規定してしま 態からいかにして法的状態を経て道徳世界を実現するのかという法哲学や歴史哲学のなかでこそふさわしい問題だと は、道徳目的論の問題は、有機的自然や美的自然に関する自然目的論としてではなく、むしろ、人間や社会の自然状 を企てる際に、これらをさらに道徳的「究極目的」から導出しようとすることを強調しなくなっている。思うにそれ 全体としての自然を、「運動力bewegende Kräfte」 やそれの働く媒質としての「熱素Wärmestoff」 から演繹すること 版では「付録」として展開しており、さらにまた、晩年の『遺稿(Opus postumum)』において自然哲学を論じる際に、 うことはできないのではなかろうか。カント自身もこの齟齬に気づいたためであろうか、この道徳的自然観の議論を であったはずであり、それゆえそれは機械論的であれ目的論的であれ、規定的概念による包摂が不可能なはずであろ 『判断力批判』第二部の本論(「分析論」と「弁証論」)の自然目的論の議論から区別するために『判断力批判』の第三 さてカントの自然論を改めて振り返ると、自然全体(世界) とは、カントにとって、「無規定的」(B691) な理性理念

のもとに包摂されうるかのように判定することができるにしても、全体としての自然は、「無規定的」な存在として、 然的なものの合法則性」としての合目的性の原理によって、その自然内部的存在者をあたかも或る「一定の目的因」 問うという問題が有意味な問題として浮かび上がってこよう。既述のように、自然内部の特殊な存在者であれば、「偶 定の目的概念に基づいて目的論的に判定してしまうことが不可能な存在である。このような意味からすれば、自然 自然目的論の問題をこのように道徳的自然観から解放する場合には、改めて、全体としての自然の存在論的身分を

とは、それを全体としてみた場合には、存在論的に偶然的な存在だと言わざるをえないのではなかろうか。

であろうか。カントの道徳的自然観がそれに接近する一つの道ではあるが同時にその道は自然の全体的未規定性を超 性ignava ratio」(B718)のなせることであり、さらにまた、自然全体の「合目的的統一」を無規定的な理念としてで 出してしまう危険性があることは上述したとおりであるが、また、道徳的主体という「究極目的」ではなくして、た はなく物自体として「実体化」してしまうのは「倒錯した理性perversa ratio」(B720)のなせることである。 とえば自然神学のように「自然の外部」に一定の最高存在者を想定するような自然観も、カントによれば「怠惰な理 全体としての自然のこの存在論的偶然性は、なおも何らかの原理によってその偶然性から救われることができるの

的なき合目的性とでも呼びうるような合目的性においてこそ可能になるかもしれない。しかしこの場合の「目的なき・・・・・・ 的概念を想定したり或いは自然そのものを「実体化」するのではないような意味での合目的性において、いわば、目・ 言えるのではなかろうか。 目的概念から自由な存在として、その存在論的偶然性をその偶然性のままに判定するような意味での合目的性とでも 体としての自然を包摂するためにそれをより高次の目的概念に基づかせようとするものではなくして、自然を一定の 合目的性」とは一体どのような意味なのであろうか。少なくとも言えることは、この「目的なき合目的性」とは、全 いように思われる。しかしそれでも敢えてそれを合目的的に判定しようとすれば、それは、「自然の外部」に一定の目 このように見てくると、全体としての自然の存在論的偶然性はいかにしてもその偶然性から救い出すことができな

の形状についての美的判断のように、自然内部的な偶然的存在者に関わる判断であって、決して全体としての自然に の原理としての「目的なき合目的性」(66§15)であり、しかも、 もちろん、「目的なき合目的性」という言葉はカント自身の用いた概念ではあるが、周知のように、 趣味判断とは、たとえば野に咲く一輪の花とか水晶 それは趣味判断

関わるそれではない。

然は、決して一定の目的概念には包摂されえないがゆえに、「目的なき」存在と言いうるであろうし、 体としての自然についての我々の考察に重要な手がかりを与えてくれる。というのも、「無規定的な」全体としての自 として、或る一定の空間量として、さらには食用のためとか観賞用のためとして、というように、同時に悟性概念や も「純粋趣味判断」(62§13) として分析してはいるものの、その判断対象を、花という実体として、黄色という性質・ だせるのではなかろうか。というのも、自然内部的な美的存在者の判定の場合には、たとえカントがそれをあくまで 目的性」「関心なき合目的性」は、自然内部の美的存在者の判定の原理としてよりもむしろ、機械論的および目的論的 における「構想力(と悟性) の自由な戯れ」(56§9) という主観の状態は、全体としての自然を特定の目的や関心なし 目的概念を用いながら判断せざるをえないと思われるからであり、それに対して全体としての自然はその実体性や性 に判定される自然の限界に位置するところの全体としての自然の判定ないし「静観」の場合にこそ、その意義が見い に「静観的」(46§5) に見るときの主観の自由な状態にも比せられうるからである。いやそれどころか、「目的なき合 質や量に関しても、また目的に関しても「無規定的」であることにその特徴が存するからである。 しかしまたカント自身が趣味判断の分析において語る「目的なき」「関心なき」(40§2) 合目的性という概念は、 また、趣味判

との「目的なき合目的性」、それを敢えて名づけるとすれば美的自然観とでも呼ぶことができるのではなかろうか。こ 原理だと言いうるのではなかろうか。全体としての自然と我々との、目的なき自由な戯れ、全体としての自然と我々 く目的論的自然観とも異なって、自然に対する新たな見方、いや新たな課題を我々に暗示するものではなかろうか。 のような意味での美的自然観は、 このように見てくると「目的なき合目的性」の原理は、判定者と全体としての自然とが自由に戯れる状態にこそ相 またそれは判定者が全体としての自然の存在論的偶然性を偶然性のままに静観している場面にこそ働きうる 機械論的自然観と異なるのはもちろんであるが、さらにまた、 一定の目的因に基づ

には厚く御礼申し上げる。 する今後の思索の方向性を示すものと思い印刷に付することにした。なお同学会の席上、貴重なご質問やご感想をお寄せ下さった方々 衍を要する面が多々あるが、カントの自然論を手がかりにしながらも自然についての筆者の考えの概略が描かれておりこのテーマに関 配布した原稿に、若干の加筆訂正と註を施したものである。カント哲学全般にわたる議論を展開しているために細部においてはなお敷 本論稿は、九州大学哲学会(一九九七年九月) において「自然について」というテーマのシンポジウムの際に口頭発表しまた会場にも

- (1) カントの著作や遺稿からの引用に関しては、『純粋理性批判』からの引用は慣例に従い第一版をA、第二版をBとし、『判断力批 中に記してある。なお引用文中の [] 内および傍点は、特に断りのないかぎり筆者によるものである。 75)、それ以外からの引用はアカデミー版カント全集の巻数(ローマ数字)と頁数(アラビア数字)によって(たとえば X X210)、本文 判』からの引用は哲学文庫版(Philosophische Bibliothek,Bd.39a,1974)を用いその頁数のほかに節の番号を添え(たとえば265§
- ている。なおこの点についてはたとえば次の論文を参照 系化の議論は、『判断力批判』における自然の合目的性の原理による特殊偶然的な自然の目的論的判定の議論と内容上密接に関係し カントの理論哲学において、『純粋理性批判』の「超越論的弁証論のための付録」の箇所(B670-732) での経験の全体化ないし体

gang der Vernunftkritik, in Kant-Studien, Bd.83,1992,pp.294-303 Gregor Schiemann, Totalität oder Zweckmäßigkeit? Kants Ringen mit dem Mannigfaltigen der Erfahrung im Aus-

(3) 機械論と目的論の関係という問題は、カントにあってはさらに、規定的判断力と反省的判断力の関係の問題であり、また、「構成 的」原理と「統制的」原理の関係の問題とも重なる。これらの問題は、カント哲学のそれぞれの局面で問題になるとともに、カン 理念は歴史の「構成的」原理なのかそれとも「統制的」原理なのかという問題にも連なるであろう。このようにそれぞれの局面に 論」での道徳法則と「弁証論」での最高善の関係の問題であり、さらには、自由の実現をめざすカントの歴史哲学において自由の てまた、『純粋理性批判』の経験理論にとっての「分析論」と「弁証論」の関係の問題でもある。『実践理性批判』で言えば、「分析 いは、自然の構成的原理の能力である悟性と、自然の体系的統一の統制的理念の能力である理性との関係の問題であり、したがっ 理性批判』においては、「因果性の原則」それ自身における「構成的」側面と「統制的」側面(B221f.) との関連の問題として、あス ト哲学全体にとっての基本的問題でもある。すなわち、本稿におけるような有機的自然の判定の場合のみならず、たとえば、『純粋

そのような見通しのもとで、特に『判断力批判』におけるカントの自然理解に焦点を当てながらその問題を論じているのである。 問題が生じてき、しかもこの問題はひとりカント哲学の問題にとどまらず、近現代哲学の根本に関わる問題だと思われる。本稿は わすのであるが、それとともに、カント哲学を全体として理解する場合にも、いやその場合にこそより本質的な問題として上記の おいて、規定的判断力と反省的判断力の関係や、「構成的」と「統制的」の関係をどのように解釈すべきかという問題に我々は出く なお、『純粋理性批判』に限ってこの問題を論じた次の拙稿を参照していただければ幸いである。

円谷裕二、「世界と経験―カントの超越論的哲学の帰趨―」、九州大学文学部『哲學年報』第五十五輯所載、一九九六

4 この点については次の拙稿を参照していただきたい。 円谷裕二、「存在と経験―カントの超越論的哲学の問題―」、九州大学哲学会『哲学論文集』第三十二輯所載、一九九六 円谷裕二、「『純粋理性批判』における世界概念について」、哲学会編『哲学雑誌』第九八巻第七七〇号、一九八三

『オプス・ポストムム』における世界概念や全体としての自然と「運動力」や「熱素」との関係については以下を参照。

ders., Kants Nachlaßwerk und die Kritik der Urteilskraft, 1939 G. Lehmann, Ganzheitsbegriff und Weltidee in Kants Opus Postumum, Kant-Studien, Bd. 41,1936 E. Adickes, Kants Opus Postumum, Kant-Studien Ergänzungshefte, Bd. 50,1920 5

坂部恵、「最晩年の「移行」―『オプス・ポストムム』「束1」の世界―」、『「ふれる」ことの哲学』(岩波書店)所載、一九八三